

キラッ! 輝く人たち

茨城県西部の5市町(古河市、境町、坂東市、常総市、八千代町)で生産されるお茶を総称して「さしま茶」と呼びます。

今月紹介する鈴木宏太郎さんは、江戸時代から続くお茶農家の後継者。一番茶の収穫時期を間近に控えた忙しいなか、就農のきっかけやお茶づくりの魅力についてお聞きしました。

家業を継ぐというプレッシャー

祖父・父の3代でお茶の生産を営む宏太郎さんは2人兄妹の長男。幼い頃から跡取りになることを期待されていました。

「実は、工業高校へ進学して整備士になりたかったんです。機械が好きで、逆に農業が嫌いであつて悪く見えていました。きたないし、よごれるし、疲れるし……。将来、農業を継ぐのかと考えると嫌でたまらなかった」と親や家に反抗した中学時代を振り返ります。

半ば強制的に農業高校の農業科に進学。親元を離れ3年間、寮生活を経験しました。「果樹栽培の実習を通して、農業っておもしろいんだな、つらいだけじゃないんだなと実感しました」と話す宏太郎さん。徐々に家を継ごうという気持ちが芽生えてきたといいます。

全国の仲間と切磋琢磨

大学では農業に欠かせない微生物を生かした土づくりや、産地に埋もれている食品を有効活用させる食品加工を学びました。

大学卒業後は、本格的に茶の栽培管理を学ぶため、静岡県島田市の野菜茶業研究所に入学。「祖父・父・自分の3代がこの研修所で学びました。3代が同じ畑を耕すなんて全国でも珍しいそうです」と嬉しそうに話します。

全国各地の仲間と切磋琢磨の2年間。ここでの経験が、地域を引っ張っていける存在になりたいと考えるようになったきっかけです。

「守り続けたい伝統の味」

ひろたろう
鈴木宏太郎さん (28歳・東諸川)



たくさんのお茶で親しまれるお茶づくり

約2ヘクタールの茶畑を管理・生産する宏太郎さん。なるべく化学肥料は減らして有機肥料を入れ、土壌環境を大切にしています。

「代々受け継いできた伝統の技法を守りつつ、家族でこの家の味を守っていききたい。いい製品を地元の皆さんに届けていければと思っています」と話す宏太郎さん。「最近ではペットボトルのお茶が流通し、急須でお茶を入れることも少なくなっています。ペットボトルのお茶とは色も味も違うことを多くの人に知ってもらいたい」と、日本茶アドバイザーとしてお茶の普及にも力を入れています。

たくさんのお茶で親しまれるようなお茶づくりを家族と共にしていきたいと話します。宏太郎さんは、お茶への愛情や情熱があふれていました。



▲緑色の新芽が一面に広がる茶畑と家族の笑顔